

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

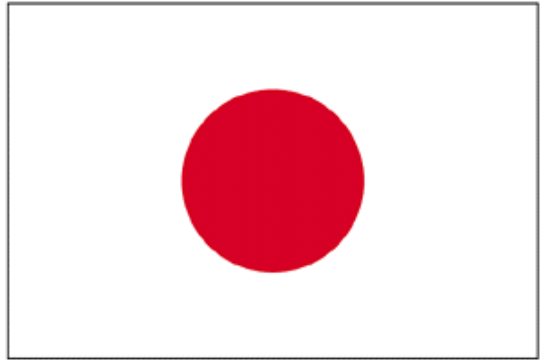
敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0060号  
護國青年會議機関紙 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成21年5月6日

# 慶祝！天皇皇后両陛下ご結婚50年



日本中が熱狂し、感動したご成婚パレードから半世紀が経過した皇紀二六六九年四月十日、天皇皇后両陛下がご結婚五十年をお迎えになられた。ご皇室の悠久の歴史において在位中にご結婚五十年を迎えられることは先帝陛下と皇太后陛下に続いての慶事であり、日本国民の一人として心より慶祝申し上げ、両陛下とご皇室の益々の弥栄をご祈念いたします。

宮中で行われた記者会見で天皇陛下は皇后陛下に対するお気持ちとして、「何事も静かに受け入れ、私が皇太子としてまた天皇として務めを果たしていくうえに、大きな支えとなってくれました」と述べられた。さらに「五十年間、よく努力を続けてくれました。



また記者から五十年にあたり、贈る言葉を問われたのに対し、天皇陛下は「結婚五十年にあたって贈るとすれば感謝状です」と述べられた。

この五十年間、お二人は常に国民の安全やその生活に心を砕いてこられた。即位後だけでも四十七都道府県すべてを訪れ、阪神淡路大震災、新

悲しいことや辛いことがあったと思いますが、よく耐えてくれたと思います」と労いのお言葉を掛けられた。皇后陛下は「五十年の道のりは長く、時に険しくございましたが、陛下が日々真摯に取り組むべき道を求め、指し示してくださいましたので、今日まで一緒に歩いていくことができました」と話された。そして天皇陛下は「結婚五十年を本当に感謝の気持ちで迎えます。私も二人を五十年間にわたって支えてくれた人々に、深く感謝の意を表します」と、声を震わせて感謝のお気持ちを述べられた。

皇后陛下は「私はやはり感謝状を・・・。何かこれだけでは足りないような気持ちがありました。心を込めて感謝状をお贈り申し上げます」と話された。ご結婚当時を知る多くの国民は、五十年前に思いを馳せ、目頭を熱くしてテレビに見入ったことだろう。斯く言う私も万感の思いを込めて会見を見ていた一人である。

お二人がご結婚されたのは昭和三十四年、日本が先の大戦による荒廃から立ち直り、高度成長期に向う頃だった。財団法人・軽井沢会が運営するテニスコートで芽生えた恋は、やがて大輪の花を咲かせた。お二人の「テニスコートのロマンス」はあまりにも有名な話である。当時の皇太子妃美智子さまは、それまでの皇室の慣例を破る「民間」のご出身で、前述したように「恋愛」によるご結婚だった。しかも結婚の儀のあとの馬車パレードは普々及し始めたテレビで全国津々浦々に実況中継された。ご結婚が皇室と国民の距離を急速に縮めたことは間違いない事実だ。

編集人

# 日本核武装論と非核三原則

中国が新疆ウイグル自治区で実施した核実験による被害で同自治区のウイグル人ら十九万人が急死したほか、急性の放射線障害など甚大な影響を受けた被害者は百二十九万人に達するとの調査結果が札幌医科大学の高田純教授によってまとめられた。被害はシルクロード周辺を訪れた日本人観光客二十七万人にも及んでいる恐れがある。五月一日発売の「正論」六月号掲載の「中国共産党が放置するシルクロード核ハザード」と題する論文で明らかにしている。(引用・産経新聞)



支那とは人間の命など虫けら同然にしか思っていない国だ。それは天安門事件やチベットの弾圧にも表れている。もつとも支那人は、ウイグル人やチベット人を人間と思っていないのだから。東トルキスタンやチベットの土地は手放さないが、そこに住むウイグル人やチベット人は根絶や

しにして構わないと思ってい

るのだらう。支那は、おぞましい実験で得た核兵器を日本に向けている。

「支那共産党に非ずんば人に非ず」と思っている支那にとって日本人に核兵器を使うことに何の躊躇いが必要というのか。

不幸なことに日本に深く関わ

っている国の中には支那だけでなく、多数の自国民が餓死している惨状を無視し核開発に余念のない北朝鮮、大戦のどさくさに紛れて北方領土を略奪した旧ソ連、すなわちロシア、そして広島と長崎で人体実験を行った米国、これらの国々も核を持っている。このような状況下においても日本は頑なに前世紀の遺物・非核三原則を守っている。日本は「核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず」という法律でもない四十二年前の国会答弁を後生大事に守り、国民の安全を危険に晒して良いのだろうか甚だ疑問である。

「憲法九条を守り、非核三原則を守っていれば平和は維持される」こんな脳天気な考えが罷り通る国は、世界中何処を探しても日本だけである。

日本の全土を射程に入れるノドンを三〇〇発以上も有している北朝鮮が核を搭載して日本に向けて発射したとき、何処の国が身体を張って日本を守ってくれるというのか。

日本が頼みの綱としてきた米国の核の傘は、すでにあちこちに穴が開き使い物にならないのが現状だ。今こそ可及的速やかに非核三原則を廃棄して、日本が核を保有することのメリットを論議すべきである。

日本が世界から畏敬される

国家となるには、早急に憲法を改正し、同盟国の平和と安全の為に血を流す覚悟があることを示さなければならぬ。日本の経済力が世界に誇れるようになった如く、軍備においても世界のリーダーとしての力を示し、不退転の決意で邁進しなければならぬ。

しかし、「憲法九条と非核三原則を守っていれば平和は維持できる」と宣言する平和ボケした政治家やジャーナリスト、その戯言を喧伝するマスコミが存在するが、それは容易ならざる道である。

三年前、当時の自民党政調会長の中川昭一が、日本の核武装について「議論は必要」と述べたところ、朝日を始めとする反日マスコミから「近隣諸国を疑心暗鬼にさせる不見識な発言だ」と一斉に批判し、議論することさえ悪と断じたことがある。自由主義国家の日本において、自由闊達な議論を封じるとはマスコミの横暴に他ならない。

二〇〇六年十一月、非核三原則の矛盾を説き、核保有議論の必要性を繰り返す当時の麻生太郎外相に対して、民主党以下の野党各党は罷免を要求している。自分たちの主義主張と異なる意見だから国務大臣といえども罷免させるとは思いますが、も甚だしい。

「日本核武装論」を否定する

輩は、非核三原則を前提としいるが、三原則が出された当時は、米中ソによる核のバランスがあり、互いに牽制しあうという意味では抑制力ともなっていた。ところが北朝鮮が核を持ち、日本の主権と国民の安全を脅かすようになって、その対策が必要となり国際情勢が変化すれば、過去の方針に固執する意味がなくなるのは必然だ。

「日本核武装論」は一枚のカードであり敵国の武装強化に対して丸腰を強調するとは、「ウチは貴方が泥棒に入っても捕まえませんよ」と宣言するようなもので、そんな馬鹿は三千世界の何処を探してもいない。現状では「核をもつて核を制す」ことが無理というのなら、少なくとも何の役にも立たない「非核三原則」は廃棄すべきである。それだけで日本を取り巻く世界は大きく変化するだらう。

編集人・戸出蒼流

**慶祝「昭和の日」**

日刊ひびくらは先帝陛下の御遺徳に心から感謝と敬意を表し、今日の佳き日が、次世代へ肅々と語り継がれることを願います。

「日本は毅然と在れ」この願いを昭和の日に託します。